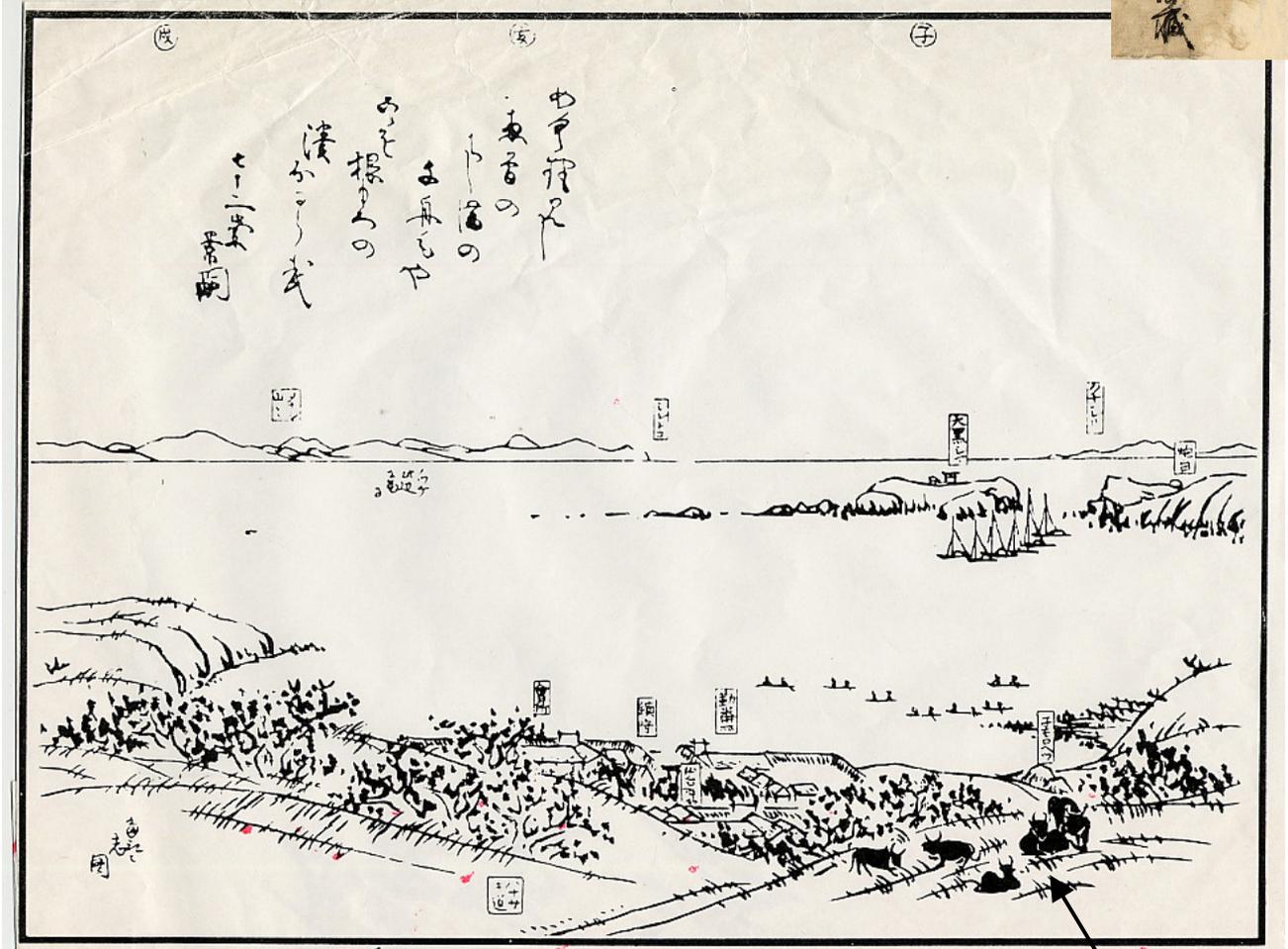


「加賀家文書」の調査研究から～その 33 史料「日記 ノツケ 伝蔵」

～根室場所のアイヌを天然痘から救った貴重な記録からX～



根室場所での『牛の飼育・使役』の様子



この絵は、松浦武四郎が子モロ（根室）へ来た時に描いたものです。（蝦夷地調査のために、6回来ていますが、内4回は今の別海町へ来ています。）

この絵をもとに、「木版画」にしたのです。武四郎が描いた絵とは多少の違いがあります。

さて、この絵には、簡単な説明がついていますので、当時の様子がよく判ります。手前の右に「牛」と思われる動物が描かれています。この5頭の動物は「エゾシカ」か、などという話もありました。

「加賀家文書」によると「松平陸奥守様御渡御演説書」（安政6年（1859）11月27日、幕府は会津・仙台・久保田・庄内・盛岡・弘前の各藩に蝦夷地を分け与え警備・開拓にあたらせました。）この際の引継ぎ書として、「人別・馬牛・フウレン、ヘトカ地名小名・塚々・立て札」などが書き出され、その中に、

- | | |
|---------|---------------------|
| — 御預かり馬 | 七十六 疋 |
| — 牛 | 拾 頭 内 背の白い牛(ほう牛) 六頭 |
| | 黄牛(沙牛-さぎう) 四頭 |

右は去辰年より請負人方にて買い入れ、飼付方いたし候事

と記されています。(子モロ場所は、ニシベツ川の古川の河口からチャシコツ、ここからシカルンナイまでを結んだ線が仙台藩と会津藩の境界となりました。以後、明治になるまで別海の大部分は会津藩の領地となりました。境界の大部分は、岬の先端、川や湖などが多いのですが、会津と仙台藩の境界は、なぜ、ニシベツ川の古川の河口からになったのでしょうか。これだと、「ニシベツ川」は会津藩の領地となった訳です。『同年の10月に、江戸に住んでいた松浦武四郎を会津藩士が訪ねています。』その目的はまだ判明していませんが、察するに、蝦夷地の諸事に熟知している武四郎の考えが反映しているものと思われます。)

この文書によると、子モロ場所の請負人藤野が安政3年(1856)に買い入れて飼育していた事になります。武四郎の子モロ港の絵図からは、5頭の牛が放牧されていることがわかります。武四郎が子モロへ来てこの絵図を描いたのが、安政5年(1858)の調査の時だから(牛5頭)、年々減少していったのか、5頭だけ放牧されていたのかは不明です。もう少し、「藤野家文書」などを調べるとわかるでしょう。

さて、これらの牛が何に使われたのか。文久2年(1862)に、伝蔵が藤野家の箱館(函館)本店に出した「注文帳」の中に、「牛の鞍、しかも丈夫な物」を注文しています。この「牛の鞍」は、何に使われたのか。この「牛の鞍」の話を、加賀実留男さんが来町されたときに伺ったところ、「昔は、八森辺りからも、収穫物を牛に載せて、秋田までは運んだ。」とのことでした。子モロでも、察するに、荷役として使われたようですが、詳しいことはわかりません。(調査員 戸田峯雄)

ふるさと講座・歴史系のお知らせ

別海ミステリーツアー第3弾

「古代竪穴住居跡をめぐる」

別海町には、現在、縄文～江戸時代の遺跡が85ヶ所確認されています。この度のミステリーツアーは、地表面から良く観察できる擦文時代(約1200年前)の竪穴住居跡を海岸線を中心にめぐって見たいと思います。

- 日 時 11月22日(土) 午前9時～12時(悪天中止)
- 場 所 集合・お話 別海町郷土資料館
移動・巡見 風蓮湖から尾岱沼の飛雁川付近の竪穴住居跡を予定
- 定 員 10名程度
- その他 参加希望者は、11月21日(金)までに電話・FAX・メールなどで郷土資料館まで申し込みください。

別海町郷土資料館だより No.112

発行日 平成20年11月1日

発行所 別海町郷土資料館

別海町別海宮舞町30番地

電話 0153-75-0802 (FAX 兼)

e-mail kyoudo@betsukai.jp

編集後記

寒くなってきましたが、遺跡めぐりには春先と同様下草が枯れるため絶好の季節となります。約千年前の情景を思い浮かべてみませんか。さて、この季節、渡り鳥の賑やかな季節となっています。風蓮湖・野付半島どちらもお勧めです。(石渡)